

Content

「地質情報展 2007 北海道
—探検！熱くゆたかなぼくらの大地—」
開催

産総研一般公開及び地質情報展への
「風船でカルデラ地形を作ってみよう」
出展報告

全地連「技術 e- フォーラム 2007」
参加報告

日本地質学会参加報告

平成 19 年度「防災の日」総合防災訓練に
参加

地質情報構造規格 GeoSciML
実務者会議出席報告

石野・鈴木監事視察

新人紹介

スケジュール

編集後記

「地質情報展 2007 北海道—探検！熱くゆたかなぼくらの大地—」開催

下司 信夫・斎藤 眞（地質調査情報センター）

2007 年 9 月 7～9 日、北海道札幌市の北海道大学クラーク会館にて「地質情報展 2007 北海道—探検！熱くゆたかなぼくらの大地—」が開催されました。今回の地質情報展は、北海道内外の地質関係機関との連携の下、札幌周辺で行われたさまざまな地質・地学系の行事を統合した“北海道 Geo-Week2007”の一環として開催されました。

地質情報展は北海道大学クラーク会館を会場として行われました。北海道内外の地質をはじめとするさまざまな地質情報を多面的に紹介する、50 を超えるさまざまな展示や体験コーナーが設けられ、3 日間の開催期間中に 1,200 名を超える方々に来場いただきました。

今回の情報展では、北海道の地質の大きなトピックである北海道のさまざまな地下資源の紹介を中心的な展示のひとつとして取り上げました。石油資源開発（株）には、札幌市内に供給されている都市ガスのほぼ全てをまかなっている勇払油ガス田の原油資料や掘削ビットの実物などを出展していただきました。札幌の都市ガスが道内から産出している天然ガスでまかなわれていることはほとんど知られていないようで、この展示を通して、札幌市民が毎日利用しているエネルギーが足元の地質と密接に関係していることを実感していただくことができた



写真 1 メタンガスハイドレートの燃焼実験を見る札幌市北九条小学校のみなさん。

思います。また、産総研北海道サイトのメタンガスハイドレートラボには、メタンガスハイドレートの燃焼実験を出展していただきました。将来の有望な燃料資源のひとつと考えられているメタンガスハイドレートの実物を手に取り、また“氷”が燃える様子を目の当たりにした参加者の驚きは大きかったようです（写真1）。

また、今回の情報展では、従来からのパネル展示のほかに多くの体験型の展示を行う努力をしました。そのため、例年にも増してさまざまな体験実験が出展されました。たとえば、堆積実験ではさまざまな種類の手製の実験装置を駆使し、三角州の形成や河川の蛇行、リップルマークの形成などを実演しました。目の前でさまざまな地層や構造ができてゆく様子に、多くの参加者が釘付けになっていました。例年おなじみになった石割り体験も、子供のみならず大人にも大人気でした。また、エキジョッカーの実演も説明者の熱のこもった語りに引き込まれ、大人も子供も興味津々でした（写真2）。

さらに、今回の情報展の特徴として、道内各博物館との協力により実現した大型化石標本の展示が挙げられます。北海道博物館活動センター、沼田町化石館のご協力のもと、サッポロカイギュウや、ヌマタカイギュウ、ヤマシタヌマタネズミイルカの復元骨格標本が展示されました。全長7mに及ぶサッポロカイギュウの全身骨格を前にして、こんなに大きな生き物が地質時代の札幌に“本当に”生息していたのだと、来場した方々の驚きは大きかったようです。

今回の地質情報展での初めての試みとして、“サテライト会場”を設置しました。サテライト会場は札幌駅西口改札前のコンコースに約8×6mの広さで展示され、地質情報展の紹介パネルや、(社)全国地質業協会連合会による地質百選のパネル展示、地質学会表彰を受けた写真家の北中康文氏による「日本の滝」写真集から選んだ滝の写真を展示しました。サテライト展示の目玉として、北海道三鉱石油(株)より提供いただいた石炭塊(写真3)を展示しました。この石炭は現在も露天掘り採掘を続けている美唄市内の三美炭鉱より産出したものです。展示された石炭をみてその思い出を懐かしく語ってくださる年配の方々がいる一方、若い方々は実物の石炭を見るのははじめてとおっしゃる方も多く、世代によって石炭に対する反応が際立って違っていることが印象的でした。人通りの多いコンコースでの展示ということもあり、通りかかった多くの方々に展示を見ていただくことができました。またサテライト会場の展示をみて地質情報展にご来場いただいた方も多く、高い宣伝効果があったと思われます。

今回の地質情報展は、北海道立地質研究所等、北海道の

地質関係各機関や自治体との密接な連携の下に計画・実施され、大きな成功をおさめることができました。このように培われた関係各機関との連携関係を今後の地質研究や一般普及活動に継続的に役立ててゆくことが重要です。また、今回の情報展では、サテライト会場の設置や地元博物館等の出展展示など、さまざまな新たな企画が試みられました。これらの経験を財産として、地質情報展をより効果的な、地域の地質情報に密着したアウトリーチ活動として展開してゆくことが今後の課題と考えられます。



写真2 エキジョッカーによる液状化実験にびっくり。



写真3 サテライト会場に展示した三美炭産の石炭塊。

産総研一般公開及び地質情報展への「風船でカルデラ地形を作ってみよう」 出展報告

並木 敦子（地質情報研究部門、現 金沢大学）

昨年の産総研一般公開では火山活動研究グループとマグマ活動研究グループから火山関係の体験型実験を出展し好評を得た。そこで2007年の一般公開では地質標本館の前で地球科学関係の実験をまとめて展示する事になった。地質標本館では三宅島火山の特別展が行われる為、実験の方でも三宅島に関連したものを出展する事になった。2000年の三宅島の活動では山頂にカルデラが出来た。実験でカルデラを作ろう、と一般公開の火山実験を中心となって進めている高田 亮氏が発案された。昨年から一般公開に出展している他の方々はそれぞれ持ちネタがあるのだが、今年から参加の筆者には何も無い。気がついたら筆者がカルデラ担当になっていた。

文献をあたってみると、カルデラ実験の簡単な方法としては風船を使うのがごく一般的な方法である事がわかった。マグマ溜まりには風船を使えば良いという事で風船と足踏みポンプをチューブで繋ぎ、間に空気をリークさせる為のバルブを加えるシステムが出来上がった。陥没地形を作る土には試行錯誤の結果、ジョイフル本田で扱っていた黒焼土を使う事にした。容器にはタライ（直径1m強）を用いた。道具立てが揃い、実験の方法も固まった。まず、先端に風船の着いたチューブをタライの底にガムテープで固定する。その上に十分な量の土をかぶせる。足踏みポンプを用いて風船を膨らませる。膨らんだ風船が土から出てきてしまったならばその上に土を被せ、軽く押して土の表面を固める。バルブを開いて風船の中の空気を抜くと、風船の上部が陥没し、カルデラが出来る。

何とかカルデラは出来る様にはなった。しかし、風船がしばむとその上が陥没するというのはあまりにも当たり前である。そんな事で火山学者ならまだしも、一般の人や子供の興味を引き付けられるのか、不安なまま一般公開当日を迎えた。

一般公開当日、まずはサイエンスパートナーシッププログラムに参加していた中学校の先生方にカルデラ実験を見てもらった。その反応はあまり芳しいものではなかった。それも仕方の無い事である。2000年に三宅島でカルデラが出来た事を多くの方は知らないし、火山の実験なのに噴火しないで穴凹だけが出来ても何だか良くわからない。

朝からの雨もあがり、ぼちぼち子供の来客が増えてきた。すると何故か子供は大人と違う反応をしてくれた。カ

ルデラを作ると興味深そうに観察し、風船が膨らんだだけでもびっくりする。膨らんで土の上に出てきてしまった風船を隠す作業も率先して手伝ってくれる。足踏みポンプを押したり、バルブをひねって風船の空気を抜く操作もやりたがる（写真1）。結論として、この実験は大人には受けないが、子供は喜ぶ、と思いながら一般公開は終わった。

後になって、子供にこの実験が受けたのは単に子供は泥遊びが好きだから、という事に気がついた。泥遊びが好きでな子にとって、タライに土が入っているのは、それだけで魅力的なのだろう。しかも、これまた子供が好きな風船を使って彼らが見た事もない陥没地形を作るのだから、それは受けて当たり前である。しかし、そこには火山学的興味や理解はまったく無い。一般公開の目的は子供に遊んでもらう事ではなく、興味を持ってもらう事である筈だ。そういう意味で敗北感が残った。

リベンジの機会は札幌で9月に行われた地質情報展で与えられた。まず、改良点として高田氏から「噴火しながら陥没すると良い」と提案を頂いた。そこでリークバルブの先にもチューブを付け、風船の空気を抜くときに火山灰代わりの小麦粉が噴火するようにした。この噴火は実演に参加していただいた古川竜太氏の工夫により長時間続くようになった（写真2）。また、札幌という土地柄を生かして「カルデラを作る実験」ではなく「洞爺湖や支笏湖のでき方を見せる実験」と説明した。

その結果、大人の方からは「噴火でカルデラが出来るメカニズムが分かった」と前向きな評価を頂いた。反省点として、洞爺湖や支笏湖では噴火している真下が陥没したと思われるが、実験の都合上、噴火する位置とカルデラが出



写真1 一般公開で子供がカルデラを作る様子（高田 亮氏撮影）。

来る位置が異なってしまった為、別の場所で噴火した為に洞爺湖や支笏湖が出来たと誤解を与えてしまった。噴火した場所が陥没する実験を今後模索したい。

さて、気になる子供の反応であるが、タライに張り付いて何度も実験を見ている子に聞いてみた。

「火山に興味ある?」「全然」「……。」
やはり、泥遊び以上の意味を感じ取ってもらうのは難しいようである。

最後にこの場を借りてカルデラを作るように提案頂いた高田 亮氏、実験方法の議論をして頂いた竹内晋吾氏、実演に参加して頂いた及川輝樹氏、篠原宏志氏、東宮昭彦氏、古川竜太氏、に感謝したい。



写真 2 地質情報展で噴火してできるカルデラ。

全地連「技術 e- フォーラム 2007」参加報告

渡辺 真人 (地質情報研究部門)

表題フォーラムのうち、筆者が参加した一般向けの講演会、シンポジウムについて報告します。

9月7日午前の竹村公太郎氏(財団法人リバーフロント整備センター理事長)の「広重に見る日本近代文明の萌芽」と題する講演では、日本の文明の成り立ちを地形学・地質学などの視点から見ると面白く、それを通じて国土の合理的な利用に地質調査業が役立つことをアピールできるという話でした。東京低地の地盤を直感的に理解するために、広重の描いた鶴の住む江戸三河島の絵を見せて、近世まで付近に湿地が広がっていた、という例が紹介されました。

同日午後には、「自然とどう関わるか—地質調査業の役割—」と題するシンポジウムが行われました。北海道環境財団理事長の辻井達一氏をコーディネータとし、岡田弘氏(北大名誉教授)、石森秀三氏(北大環境学高等研究センター長・教授)他計4名によるパネルディスカッションが行われました。

岡田氏は、地球の恵みと地球がもたらす災いを、野外で実感して理解するのが重要であることを紹介されました。岡田氏は有珠・洞爺湖地域を世界ジオパークネットワーク加盟のジオパークにしようと努力されています。

石森氏は、20世紀の日本の観光は団体で名所を周遊する他律型の観光であったが、個人・家族・小グループによる自律的な参加・滞在型観光が伸びて来ており、その対象として北海道の自然資源は魅力的で、北海道で新しい観光のあり方が創造できるのでは、と提言されました。

討論では、参加・滞在型観光としてジオツーリズム・エコツーリズムなどが有望であること、景観を保全するには観光を通じた地域振興も重要であることなどが議論されました。地質調査業に携わる人が、語り部として滞在・参加型の観光に関わることへの期待も表明されました。

9月7日午後には、和泉晶裕氏(北海道開発局)による「日本風景街道の源流—シーニックバイウェイ北海道の取り組み—」と、北川健司氏(遠軽町長)他による「白滝黒曜石遺跡ジオパーク構想について」という二つの講演が行われました。

「シーニックバイウェイ北海道」は、美しい景観作りと地域の歴史・文化・特産物の活用により、ドライブの途中に寄り道(byway)してもらって地域振興をしようという活動です。行政と各種団体の共同により、地元の人



写真 パネルディスカッションの様子。

の様々な活動が盛り上がっています。地元の資源と地域の人の取り組みで地域振興を目指す点で、この活動はジオパークと基本的なスタンスが同じです。シーニックバイウェイの成功は、ジオパークの今後の活動に参考になることが多いと感じました。

北川氏はジオパークを通じた町作りについて訴えました。白滝黒曜石遺跡を長年調査している木村教授は

遺跡の重要性を紹介し、この素晴らしさを多くの人に伝えるにはどうすればよいか、「観光考古学」という立場で研究したいと宣言されました。

今回参加して、地球科学は一般の人々に興味を持ってもらえる題材であり、今後生涯学習の場や観光の対象としてもっと活用されていくべきである、と感じました。

日本地質学会参加報告

齋藤 眞（地質調査情報センター）

日本地質学会 114 年学術大会が 9 月 8 日から 13 日まで北海道大学（札幌）にて開催されました。このうちシンポジウム・セッション・表彰式等が 9 月 9 日から 11 日まで行われ、その前後に、見学旅行、一般向けの講演会（札幌、夕張）、就職説明会が行われました。前回北海道大学で行われたのが 1994 年でしたので、13 年ぶりになります。前回は 9 月の下旬だったのに対し、今年は、時期が 9 月上旬と早かったこと、台風が熱い空気を持ってきたこともあって、今年は例年になく暑く、ビールがうまかったと思います。参加者は、当初の目標であった 1,000 人をやや下回って 925 人でした（学会員総数は約 4,500 人）。シンポジウム、セッションは合わせて約 650 件の発表が行われ、その 3 日間にランチョン、夜間小集会、中高生の発表、緊急のポスターセッション、企業展示、受賞者の表彰式が行われました。

今回の学会のトピックの一つは、地質情報研究部門の青矢陸月氏が、柵山雅則賞を受賞されたことです。柵山雅則賞は、37 才以下のいわゆる若手に限定した地質学会賞の

意味で設けられた賞であり、岩石系の方が対象になっています。同様に層位系の方に対しては、小澤儀明賞がありますが、今回は該当者がありませんでした。青矢氏は「予定通り予定外な私の研究史」と題して予想外のことをしっかり捕まえて、研究を進めてきた彼の研究スタイルの紹介をされました。このスタイルは、研究を進展させる王道であり、大いに参考になるものでした。なお柵山賞、小澤賞は論文だけではなく、図幅等も評価の対象となりますので、若手の方はがんばっていただきたいと思います。

もう一つのトピックとして、今年から企業による就職説明会が開催されることになったことが挙げられます。今年は、準備不足で参加学生、院生等は少なかったのですが、企業側から良い感触が得られた参加者もいて、各方面からとても良い試みとの評価をされています。今後も継続される見込みです。

来年は、秋田でシンポジウム・セッションが 9 月 20 日から 22 日の予定で行われることになっています。ぜひうまいきりたんぼ鍋を！

平成 19 年度「防災の日」総合防災訓練に参加

松本 則夫・佐藤 努・小泉 尚嗣（地質情報研究部門）

「これは訓練です。地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会が臨時に召集されました」

毎年 9 月 1 日になると、早朝にこの様な連絡が電話を通して行われます。これは、東海地震を想定した総合防災訓練の一環として、産総研で行われている連絡網でのやり取りの様子です。政府が行う「防災の日」総合防災訓練では、気象庁において、観測データに異常が生じたとして、

最初に「(訓練のための)地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会(構成メンバーは、地震防災対策強化地域判定会と同じ)」が臨時に召集され、その情報が連絡網を通して、産総研の関連する職員に伝えられることになっています。この後、観測データの異常が進行したとして、上記委員打合せ会が「(訓練のための)地震防災対策強化地域判定会」に切り替わります。

地震防災対策強化地域判定会。一般に「判定会」と呼ばれるこの会は、「大規模地震対策特別措置法」に基づいて、気象庁長官の諮問機関として設置された会です。6名の地震学者で構成され、東海地域における観測データに一定以上の異常値が捉えられると緊急召集されて、東海地震発生の恐れについて判定します。この判定会で異常値が「東海地震の前兆」と判定された場合は、内閣総理大臣が「警戒宣言」を発令することになっており、東海地震予知の中核をなす会として位置づけられています。

この判定会に、産総研からは、地質情報研究部門地震地下水研究グループ長が説明員として参加しています。東海地域における産総研の地下水等観測データについて説明を行うためです。産総研では、1978年頃から東海地震予知を目的とした地下水等観測を継続しており、そのデータは気象庁にほぼリアルタイムで送られ、「東海地震の前兆」を判断するためのデータのの一つとして役立てられています。防災の日の訓練における産総研の役割は、気象庁に地下水等観測データの最新の解析結果をファックスで送り、

(臨時)判定会委員打合せ会や判定会の場でそれを説明することです。

訓練当日、まず冒頭の連絡を気象庁から受けた小泉地震地下水研究グループ長が、産総研における連絡網をスタートさせ、同時に、説明員として気象庁に向かいました。小泉グループ長から連絡を受けた職員は、連絡網に従って電話連絡を行い、関連の職員に判定会委員打合せ会臨時召集の情報が伝わります。特に、地震地下水研究グループ員は緊急招集となり、産総研内のテレメータ室において最新の観測データの解析結果を印刷し、ファックスにて気象庁へ送信しました。気象庁に到着した小泉グループ長は、判定会にてその解析結果についての説明を行いました。その後、(想定上)東海地震が発生したことを確認し、判定会としての訓練は終了しました。

なお、このような1年に1回の訓練とは別に、原則として毎月1回、地震防災対策強化地域判定会委員打合せ会が定例で行われ、地震地下水研究グループ長も参加して通常時の観測データについて情報交換を行っています。

地質情報構造規格 GeoSciML 実務者会議出席報告

伏島 祐一郎 (活断層センター、現 地質情報研究部門)・Joel C Bandibas (地質調査情報センター)

2007年9月10日から19日にかけて、オーストラリア・メルボルン市のビクトリア州立地質調査所において、地質情報構造規格 GeoSciML の実務者会議が開催されました。この会議には、二つの目的がありました。そのひとつめは、今年5月米国で開かれた GeoSciML 設計部会において構築された、GeoSciML 第二版データモデルの完成度を高めることです。そしてその結果を基に、インターネット上で地質情報交換の運用実験をおこなう環境を整える事が、もうひとつの目的です。会議の出席者は、日本・オーストラリア・カナダ・米国・スウェーデン・英国・フランス・イタリアの8カ国の地質調査所関係実務担当者、合計25名でした。日本からは、伏島祐一郎・Joel C Bandibas の2名が出席しました。5月の会議同様、密度の濃い討議が連日早朝から日暮れまで繰り返され、運用実験への道筋が見えてきました。会議の詳細な議事録は、下記のWebページとそのリンクページに発表されています。

<https://www.seegrid.csiro.au/twiki/bin/view/CGIModel/MelbourneF2F2007>

第一の目的のために、データモデルの過不足を調整しました。このうち最も重要な追加によって、他言語対応が

図られました。根本的な地質学の共通概念に関する要素を基軸に据え、それに多様な言語の専門用語を個別に対応付ける構造の追加です。この構造追加を具体化するためには、各言語の専門用語辞書を作るだけでなく、それを地質学の共通概念に関連付ける必要があります。これらの作業は、各国の地質調査機関が担当する事が最も効率的であり、GSJにもその責務を担う事が期待されました。これまで

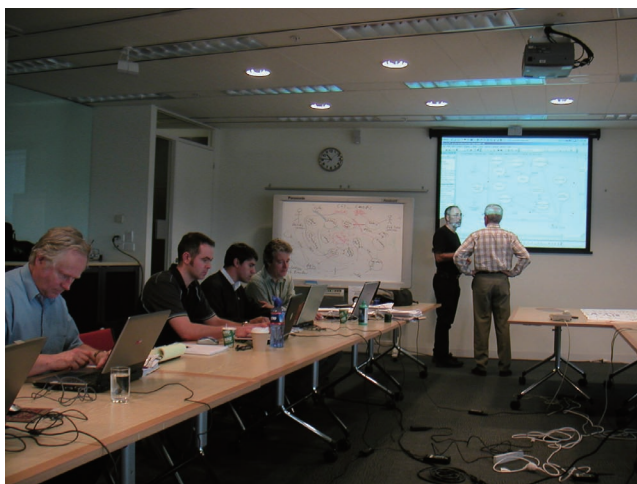


写真 たくさんの概念設計図を描きながら、活発な討議をおこないました。

GSJ が長年にわたって積み重ねてきた、多言語辞書などの成果に基づいて努力を重ねれば、積極的にこの期待に応えていくことができるでしょう。

第二の目的、すなわち地質情報交換の運用実験を目指して、その仕様の策定をおこないました。詳細に亘って議論され、大量の図と文書にまとめられた仕様の骨子を、以下に略記します：(1) 各国の地質調査機関の、多様な構成のサーバから供給される多様な地質図のつなぎ合わせと、共通凡例の多言語表示。(2) この地質図を構成する各地層の年代・岩相などの属性データの、多言語一覧表示・並べ替え。(3) 同様のデータの、多言語検索。(4) 各種システム・アプリケーションソフト・フォーマットからフォーマット間の入出力と変換。(5) 多言語メタデータによる地質図の検索。

以上の仕様はすなわち、GeoSciML 第二版を利用すると何ができるようになるかをも示していますが、そのためにはまず、運用実験を成功させなければなりません。成功に向けた準備日程も議論され、2007 年末までに、運用実験環境のプロトタイプとマニュアルなどの書類やサンプルデータの準備；2008 年前半に非公開実験と調

整の繰り返し；8 月に実験環境を完成し公開実験という道筋が定められました。準備作業の分担もおこなわれ、実験環境の基幹部分の構築は、イギリス・カナダ・オーストラリア・フランスの各機関が担当する事になりました。GSJ は、伏島と Joel C Bandibas を中心に、地質情報統合化推進室および統合地質情報研究グループが、GEO Grid と協力しながら分担作業を進めていきます。すなわち上記の多言語環境に関わる分担作業のほか、既存の数値地質図と属性データの書式変換・XML 文書作成・地質図配信サーバ構築・XML 変換システム構築などで、これらによって日本の地質情報の国際流通促進を目指します。

会議では頻繁に、OneGeology との関係も議論されました。OneGeology は、全地球を覆う電子地質図のインターネット配信を目指す国際計画で、GeoSciML の利用が具体化すれば、どちらにとっても大きな国際的周知宣伝活動になりえます。このため次回の GeoSciML 実務者会議を、すでに来年 2 月にフランスで開かれる事が確定している OneGeology 実務者会議との共同開催とする予定がたてられ、会議は無事終了しました。

石野・鈴木監事視察

富田 悟幸（地質調査情報センター）

2007 年 9 月 19 日、7 月に就任した石野監事が第七事業所を視察し、鈴木監事が同行された。

まず地質図ライブラリーにて栗本史雄地質調査情報センター長が概要説明を行い、牧本 博地質情報整備室長が地質図の作成過程、渡辺和明氏・宝田晋治氏がデータベースの説明を行なった。その後地質標本館に移動し青木正博館長が全体説明を行い、順次、資源・レアメタル・天然ガス・海洋調査・大陸棚画定を棚橋が、活断層を下川浩一氏が、火山を高田 亮氏が説明して回った。両監事は要所要所で関心を示し質問を行なっていた。活断層の剥ぎ取り標本の作成方法、富士山は何ゆえにあそこで出来たのか、富士山の山頂での噴火はおおよそ 2000 年前が最後でその後は周りからの噴火が多く、最後の噴火は約 300 年前にあったきりで静かであるという説明に対し、今後は噴火は起きそうとか、プレートとの関係はとか、地震と火山の活動が連動するのとかか質問をされていた。

次に岩石薄片作業現場において、大和田朗氏・佐藤卓

見氏が作業工程順に説明した。30 ミクロンの厚さの薄片が製作者の指の感覚で作成されていく事を説明した。両監事は薄く綺麗な薄片に興味を示されていた。

最後に駐車場脇の観測施設で高橋 誠氏・松本則夫氏が地震地下水観測網整備の説明を行なった。全国 40 箇所以上ある観測井がネットワークで結ばれていて、そのデータの集積を地質情報研究部門で行なっている。井戸で作業するときは落とし物をしないよう全てのポケットにボタンをかけないと、間違っ物を落とそうものなら観測井が使えなくなるという説明に驚かれていた。

実松 健造

(さねまつ けんぞう, 地圏資源環境研究部門)

4月より地圏資源環境研究部門の鉱物資源研究グループに配属となりました実松健造です。学生時代から金属資源や鉱床学に興味があり、博士課程では主に鹿児島県菱刈金鉱床における氷長石-石英脈の形成年代や鉱物記載などを研究しました。

幸運にして入所後も鉱物資源の研究を行うことができるのを嬉しく思っています。資源として重要なベースメタルや貴金属資源の勉強を続けることはもちろんですが、現在は新たにレアメタルの研究を行っています。多種多様なレアメタルのほとんどがまだ十分に研究されていませんが、資源として欠かせないものであるため研究を進める必要があると認識しています。日本は以前にも増して鉱物資源に乏しい状況ですので、私の調査や研究を通じて日本の鉱工業に少しでも貢献したいと思います。

学生の時は主に坑内で調査することが多く、地質調査を行うにはまだまだ経験不足であると感じています。今後は野外を歩き回って地質調査する機会を多く持てそうなので、早く地質屋としての目を養っていきたいです。よろしくお祈りします。



インドネシア、スンビン火山山頂付近（3327m）にて（2006年8月撮影）

● スケジュール

11月10日	地質標本館イベント「第19回 自分で作ろう!! 化石レプリカ "デスモスチルスの歯"」 (つくば市, http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2007/kaseki_19/kaseki_19.html)
11月19-22日	第四紀学会国際シンポジウム「アジア・西太平洋の第四紀 —環境と人類—」 (つくば市, http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/50aniv/symposium.html)
11月19-23日	第5回火山都市国際会議 (COV) 島原大会 (雲仙, http://citiesonvolcanoes5.com/jp/)
11月26日-12月15日	APEC 研修「APEC-ISTWG トレーニングコース "Human Capacity Building for Natural Resources Development and its Environmental Impacts"」
12月4日	地圏資源環境研究部門 第6回成果報告会「地圏研究のシーズとニーズの多様性」 (秋葉原, http://unit.aist.go.jp/georesenv/07houkokukai.html)
12月19日	第9回GSJシンポジウム「地質学的手法による火山活動予測 ～火山災害の軽減を目指して～」(秋葉原)

編集後記

富田 悟幸 (地質調査情報センター)

ニュースレター37号の編集を担当しました富田です。安全衛生委員会に出席したところ、7-3棟で雀蜂が入ってきたとお話がありました。実は我が家にも雀蜂の巣が出来まして……。部屋の中から蜂の巣の大きさ測定したら縦26cm 横16cm 雀蜂がウジャウジャいるのが確認できまして、早速消防署に連絡して雀蜂の巣を駆除して頂きました。今年は雀蜂の発生が多いようで消防署の方も参ってました。料金は無料でしたので、皆さんも発見したら消防署に連絡下さい。

今号はGSJ最大のアウトリーチ活動である地質情報展の報告、全地連参加報告等をさせて頂きました。地質情報展は10年以上の実績があり、毎年会場を変えて全国で開催していますが、反省会で会場設定による人の影響、人集めの苦労話等がありました。来年は秋田で開催ですが、より多くの若い方のご来場ができる広報活動を考えなければならぬと感じました。



我が家に巣くった雀蜂の巣。

GSJ Newsletter No. 37 2007/10

発行日：2007年10月30日
 発行：独立行政法人産業技術総合研究所
 地質調査総合センター
 編集：独立行政法人産業技術総合研究所
 地質調査情報センター
 栗本 史雄 (編集長)
 富田 悟幸 (編集担当)
 知花 裕美・志摩 あかね (デザイン・レイアウト)

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7
 TEL: 029-861-3687 / FAX: 029-861-3672

GSJ ニュースレターは、バックナンバーも含めて、地質調査総合センターホームページでご覧になれます。

◆ 地質調査総合センターホームページ : <http://www.gsj.jp/>

◆ GSJ Newsletter のページ : <http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>